

主催:



企画展示:
マルティナ・グロンズカーレヤック博士 (ENRS)
クララ・ヤツクル
(ポーランド・ユダヤ人歴史博物館 POLIN)
協力:**マルタ・アンシレフスカ**
(サイレント・ヒーローズ・メモリアルセンター)

学術顧問:
アレキサンドラ・ナミスオ博士
ヤン・リーデル教授 (ENRS)
ピョトル・トロヤンスキ博士 (ENRS)
ヨハネス・トゥヘル教授
(サイレント・ヒーローズ・メモリアルセンター)

日本語翻訳:
カタリーナ・シュチェパンスカ、中谷 剛

編集・校正:
ミコワイ・セクレツキ、
駒井詩子、田中優生、藤本祐平
(大阪国際平和センター)

プロジェクト・コーディネーター:
アグニエシュカ・マズルーオルチャック (ENRS)

デザイン:
sowa-szenk

特別協力:
ジャン・イヴ・ポテル教授、リオ・ラリエー
スマドゥジャ (ショア記念館) **ーフランス**

イゴル・シュチュパック博士、デニス・シャタロフ
博士、イエゴル・ヴラディイ博士 ("Tkuma" ウク
ライナ・ホロコースト問題研究所) **ーウクライナ**

ダヌテ・セルチンスカヤ (ヴィリニユス・
ガオン・ユダヤ国立博物館) **ーリトアニア**

マグヌス・パンデューロ・ジュール
(デンマーク・ユダヤ博物館) **ーデンマーク**

ダグマル・モゾロヴァー **スロバキア**

ロクサナ・ポバ (「エリ・ヴィーゼル」ルーマニア
国立ホロコースト研究所) **ールーマニア**

エレオノラ・クッシーニ (ヴィラエンマ) **ー**
イタリア

各国政府機関の助成金によるENRSプロジェクト:



本展示は、ポーランド共和国文化・
国家遺産省の「Inspiring Culture」
プログラムの一環として実施され
た共同事業です。



Federal Government Commissioner
for Culture and the Media



パートナー:



www.enrs.eu | www.polin.pl | www.righteous.pl | www.gedenkstaette-stille-helden.de

ホロコーストとユダヤ人救済の物語

生

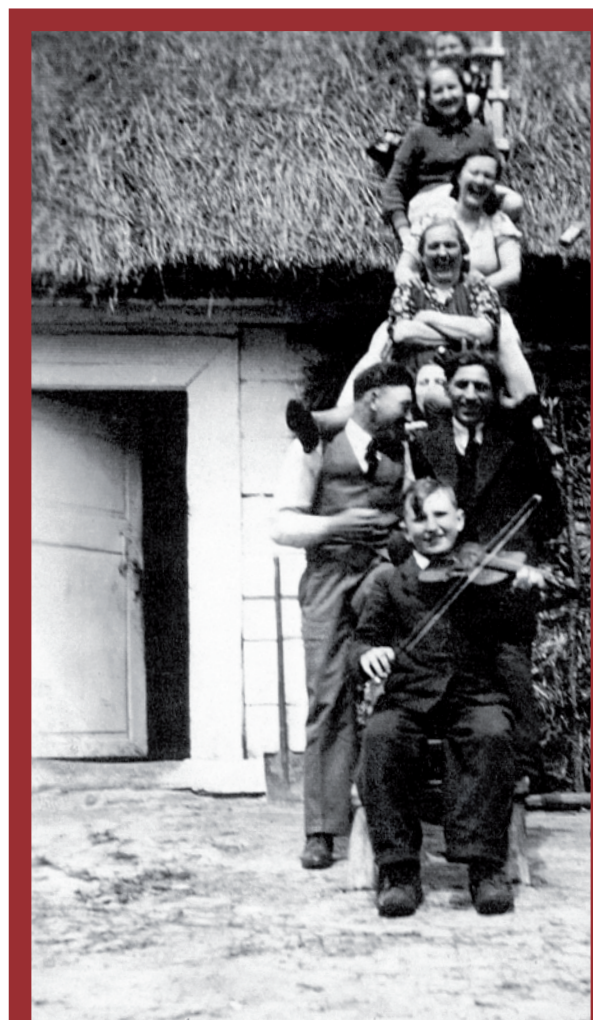
と

死

の

間

で



ホ
ロ
コ
ー
ス
ト
と
ユ
ダ
ヤ
人
救
済
の
物
語

Ministry of
Culture
and National
Heritage of
the Republic
of Poland

本展示は、ポーランド共和国文化・国家遺産省の「Inspiring Culture」
プログラムの一環として実施された共同事業です。

表紙の写真：ポーランド・ユダヤ人歴史博物館 POLIN、
ヤドヴィガ・ガヴリフ提供

ホ
ロ
コ
ー
ス
ト
と
ユ
ダ
ヤ
人
救
済
の
物
語

生
と
死
の
間
で

ユダヤ人救済の物語 ホロコーストと

1939年9月1日、ドイツがポーランドに侵攻したことで、人類史上最も悲惨といわれる争いが始まった。戦時中のヨーロッパの国々は、占領下または占領国であったり、ナチス・ドイツに追従する国あるいは中立国であったりした。軍事活動や破壊行為、それらに伴い生活条件が悪化した結果、数百万人の民間人が命を落とした。その他大勢の人々が、とりわけナチス・ドイツ政権による戦争犯罪で犠牲になった。

弾圧の主な標的はユダヤ人であった。彼らの法的な身分は国によってさまざまであったが、誰もが非難され、孤立し、迫害を受け、最後は死を迎えた。多様な民族の中でも特にポーランド人やベラルーシ人、ロシア人が深刻な人的被害を受けたが、ユダヤ人は排斥の対象となっており、シンティ・ロマ（ヨーロッパ等で生活する移動型民族）も同じように扱われた。さらに障がい者や同性愛者、エホバの証人、政治的反対勢力を含む数千人の人々が深刻な弾圧に苦しんだ。

ユダヤ人の虐殺に対して、占領下の住民は思いもしなかった選択を強いられた。この大量虐殺にどう対処すべきか。立場は大きく異なっていたのである。大部分の人々は受け身となり、家族の行末を心配した。自分の利益のために脅迫や殺人に手を染めてまで、悲惨なユダヤ人の窮状を利用した人もいた。同時に、ゲットーを脱出して隠れ家を探すユダヤ人を支援した人もいた。彼ら救済者は人道主義や宗教的・個人的信条、あるいは政治思想や利害関係などさまざまな動機から行動を起こした。それは一種の抵抗であった。

ユダヤ人への支援は、ドイツ部隊によって厳しく罰せられ、仕事を失い、踏みにじられ、監禁されるかもしくは強制収容所へ送られた。ポーランドやソ連占領下のウクライナやリトアニア、ベラルーシなどいくつかの国やセルビアでは、さらに厳しく罰せられ、死刑になることさえあった。つまり、助けようとする事自体が非常に危険であったのである。ユダヤ人を救出するという決断は、悲劇的な運命と常に隣り合わせであった。

本展示では12か国のヨーロッパの国々(クロアチア、デンマーク、フランス、ドイツ、ハンガリー、リトアニア、オランダ、ポーランド、ウクライナ、ルーマニア、イタリア、スロバキア)における救済の物語を紹介する。展示会を開催するにあたって、救済者と生存者の両者から話を聞き、展示を制作した。彼らがいかにして生き延びたのか、そのために何を行い、何を思ったのか。彼らの勇気、そして強く生きる意志を、直面しなければならなかった特殊な状況や歴史的背景を踏まえ展示をする。

支援を受けたにもかかわらず、多くの人々は生き延びることができなかった。生き延びた人は何年もの間、戦時中の経験をほとんど語らなかった。救済者の多くも自らの行動についてはさまざまな理由から口を切ることはなかった。

1963年以来、ヤド・ヴァシェム(イスラエルのホロコーストに関する国家機関)は、「諸国民の中の正義の人」の称号の授与によって、私情を捨ててユダヤ人を助けた異邦人を称えてきた。その偉業はユダヤ人の伝統に根ざしている。ユダヤ教の聖典タルムードには「一人の命を救う者は世界全体を救う」という言葉があり、この信条は「諸国民の中の正義の人」に授与されるメダルにも刻まれている。これまでに26,000人以上の人々がこの称号を授与されており、その数はまだ増え続けているが、時間が経過しているため、救済の物語の多くは未知のままである。



1933年のアドルフ・ヒトラーのドイツ首相就任によって、およそ50万人いたユダヤ系ドイツ人が差別そして迫害され始めた。ほとんどのドイツ人はヒトラーと彼の政策を支持した。支持をしなかったのはほんの少数であった。

1935年9月に制定されたニュルンベルク法では、ユダヤ人を人種として定義し、彼らを二級市民に降格させた。ユダヤ人と非ユダヤ人の結婚は禁止された。1938年11月9日にナチスによって組織的行なわれた全国的なポグロム（ユダヤ人に対する集団的かつ計画的な迫害）で、30,000人以上のユダヤ人男性が強制収容所に移送され、約100人が犠牲になった。

多くのユダヤ人がドイツに留まることがいかに危険であることかを悟り、移住の準備を始めた。第二次世界大戦が始まる前の1939年秋には、30万人以上が国外へ逃れた。戦争勃発後、ドイツ政府はドイツに残っていたユダヤ人に新たな制限を課した。彼らは公共交通機関の利用や、ドイツ国内の多くの都市で指定された地域に立ち入ることを禁止され、外出の際の門限も決められた。彼らはダビデの星（正三角形に逆正三角形を重ねた、ユダヤ人やユダヤ教を象徴する星形の印）を付けるように命じられた。ドイツではゲットーは作られなかったが、ユダヤ人は「ユダヤ人の家」という施設に住まなければならなかった。

1941年6月のドイツ軍のソ連侵攻（バルバロッサ作戦）で、保安警察及びSD（親衛隊保安部）長官の指揮下でアインザッツグルッペン（特別行動部隊）とオルポ（秩序警察）が、ドイツ軍に続いて東部へ送られた。これらの部隊が警察のすべての任務を占領地で遂行するようになったが、着任した最初の日から共産主義活動家やシンティ・ロマ、ユダヤ人に対して大量殺戮を行った。

1941年10月、ユダヤ系ドイツ人のポーランドとソ連の占領地への強制連行が始まり、ドイツの絶滅収容所およびその他の強制収容所で命を奪われた。合わせて16万5,000人を超えるユダヤ系ドイツ人が強制連行の末に殺害された。ヨーロッパの全ユダヤ人絶滅計画は、1942年1月のヴァンゼー会議でドイツ当局によって準備された。

10,000人から12,000人のユダヤ人がその脅威から脱け出そうとした。しかし、移住は禁止されており、実質不可能であったことから、唯一の選択肢は非合法的な手段を取らざるを得なかった。国外追放から逃れた人々のうち半数以上はおそらくベルリンから脱出した。軍需産業で強制的に働かされた人々は、1943年初頭に国外追放されることになっていた。

ナチスに立ち向かう人々の協力がなければ、隠れていたとしてもユダヤ人が助かることは困難であった。ユダヤ人を救出しようと取り組むうちに支援する人々の間でネットワークが広がり、隠れていたユダヤ人のうち約5,000人が生き延びた。



アリス・レーヴェンタル

ユダヤ人女性の裁縫師アリス・レーヴェンタルは、夫のアドルフと娘のルース、ブリギットとともにベルリンに住んでいた。夫のアドルフ・ゴットが1943年2月に「工場作戦」で逮捕された時、隣人であった非ユダヤ系のヨハネス・ガブリエルはアリスに隠れるように促した。

アリスと娘たちは住居を何度も変えなければならなかったが、59歳の未亡人で共産主義者のルイズ・ニッケルとともに、ベルリンの東にあるシュトラウスベルクに落ち着いた。危険な状況に陥りそうになれば、母親と娘は再び「消え」なければならなかった。1943年5月、彼女はワイマール行きの電車に乗り込んだ。知人の家に滞在させてもらう予定であったが、知人を呼び出しても誰も応じず、居留守を使われていた。その時、元警察官のヴァルター・シュミットが自発的に支援を申し出た。彼の従兄弟のエリー・メラーはアリスの娘二人を引き取った。アリスは子どもの安全を信じてベルリンに戻り、救済者たちのさまざまな助けを借りて、裁縫師として働いた。そして1943年後半に、ルイズ・ニッケルの家へ戻った。

戦後、アリスはベルリンの自宅のアパートへ戻った。数か月後、彼女は娘たちの悲劇的な運命について知らされた。娘たちは1944年に居場所を密告され、2か月後にはアウシュビッツ強制収容所へ移送され、命を失っていたのである。

助けてもらえるなんて思ってもみなかった人たちとともに隠れ家を見つけました。そして、親友だと思っていた人たちからは、わずかな支援も拒否されました。彼らは、私が精神的にまいってしまうほど、ひどく拒絶しました。

アリス・レーヴェンタル、ホロコースト生存者

オットー・ヴァイト

オットー・ヴァイトは、若い頃からドイツの労働者階級運動のアナキスト（無政府主義者）と平和主義者のグループの活動に関与していた。1936年にヴァイトはほぼ全盲となったが、ブラシとほうきを製造する工場を開いた。

戦時中、一部の製品をドイツ軍から委託されたことから、工場自体が「軍事機密」とされた。しかし、ヴァイトは国家社会主義の反対者であった。

1941年から1943年の間に、彼は視覚障がい者および聴覚障がい者のユダヤ人30名を雇って、迫害から守ろうとした。ヴァイトは避難場所を確保し、あらゆる手段を使って、彼らを強制連行から守ろうとした。

事前に警告を受けていたため、ヴァイトは1943年2月の「工場作戦」の日には工場を閉めていたが、彼の従業員の多くは強制連行された。助かった人々の中には、後にテレジン強制収容所とアウシュビッツ強制収容所に収容されたアリス・リヒトもいた。ヴァイトはテレジン強制収容所に食料品などを送り、彼女とその両親を支援した。彼はリヒトが収容所からベルリンに戻ると、終戦まで守り抜いた。

正確な数は不明であるが、ヴァイトは彼女以外の命も救うことに成功した。彼は「諸国民の中の正義の人」として認められた約600人のドイツ人の一人である。

私の人生は闘いでした。私はより良い世界のために奮闘しました。

オットー・ヴァイト、諸国民の中の正義の人

ス

1938年9月のミュンヘン協定の結果、第一次ウィーン裁定（ドイツ・イタリア間での条約）が一月後に署名され、スロバキア南部はハンガリーに割譲された。残った国土はチェコスロバキア共和国内で自治領が形成されたが、すぐに崩壊した。1939年3月15日にドイツ部隊はチェコスロバキアに入った。東はボヘミア・モラヴィア保護領内に、西はローマ・カトリックの司祭であるヨゼフ・ティソ率いる親ナチスの従属スロバキア国家に分割された。

ロ

ドイツの政策に応じて、政府はユダヤ系スロバキア人を最終的に絶滅させる方針に関与した。当時のユダヤ人の人口は約90,000人であった。

スロバキア新政府は、ユダヤ人の基本的な権利と自由を徐々に奪う反ユダヤ法を採用した。最初の規制は、法律に「ユダヤ人」という言葉を記すことや、ユダヤ人の財産をスロバキアの非ユダヤ人に譲渡すること、そしてユダヤ人の財産を清算することが含まれていた。1941年9月の「ユダヤ法典」は、ユダヤ人からほとんどすべての財産を没収、多くの職種では就業を禁止し、ダビデの星の付いた黄色のバッジの着用を命じ、異人種間の結婚を禁止した。

スロバキア社会に向けられた反ユダヤのプロパガンダは、高まる反ユダヤ主義に大きな影響を与えた。多くの人々がユダヤ人に対する規制を受け入れた。

バ

1942年10月までに、ユダヤ系スロバキア人の大多数は、セレト、ノヴァキ、ヴィフネの労働・強制収容所に入れられた。スロバキアの憲兵とスロバキア民族によるドイツ準軍事組織のメンバーに支援されたフリンカ隊の団体（スロバキア人民党の準軍事組織）によって、約60,000人のスロバキア系ユダヤ人が強制収容所に入れられた。最終的に、スロバキア当局はユダヤ人の国外追放を受け入れ、ドイツに対して国外追放にかかる費用まで負担した。1942年3月から10月の間に、約58,000人のユダヤ系スロバキア人がドイツ占領下のポーランドの強制収容所や絶滅収容所へ送られた。

キ

ユダヤ人の一部は、追放を逃れるためにハンガリーへ向かった。1942年末に強制連行が中断された時、何らかの理由により、24,000人のユダヤ人がまだスロバキアに残っていた。彼らは「免責証明書」によって保護されていた。スロバキア国民蜂起の発生（1944年8月29日）後、ドイツによってスロバキアが占領されると、ドイツ部隊によって追放が行われるようになり、約13,500人のユダヤ人が絶滅収容所へ送られた。

スロバキア政府によるユダヤ人支援の禁止令や、支援を行えば死刑につながる事が報道によって伝えられているにもかかわらず、一部のスロバキア人は迫害されたユダヤ人に避難場所や緊急支援の提供を申し出た。また、ルター派福音教会やカトリック司教、ギリシャ・カトリック司教たちは、ユダヤ人に対する人種政策を非難する書簡を送った。

スロバキアのアウロコースト犠牲者の総数は約70,000人であった。推定10,000人のユダヤ系スロバキア人が隠れながらして生き延びたと言われている。数千のユダヤ系企業、土地、家屋がスロバキア人の所有物として譲渡、清算された。

ア

ジータ・クルツ

若いユダヤ人女性が、避難場所を求めて村の家々を歩き回った。彼女は生後6週間の赤ちゃんを抱いていた。赤ちゃんの泣き声は人々を危険にさらすと、助けを差し伸べる人はいなかった。赤ちゃんをどこかで溺死させるか、誰かの家の前に置いておくことを勧める人もいた。

アルツベータ・レーヴェンバインはそれまで夫のイグナーツとスロバキア西部の都市、トレンチーンに住んでいた。1942年の「免責証明書」のおかげで、彼らは強制収容所行きを免れることができたが、2年後にはその証明書は無効になってしまった。生まれたばかりのジータと一緒に避難場所を探し始め、レーヴェンバイン夫妻はレハーク家に行くよう勧められた。レハーク家のマリアとペテルそして2人の息子は、クブリツアの村に住んでいた。最初は家族全員で受け入れてもらえる場所を見つけようとしたが、うまくいかなかった。最終的に、レハーク家は娘のジータだけを受け入れることにした。レーヴェンバイン夫妻は心が激しく痛んだが、安心して娘を預けた。

子どもの頃、両親から離れておばさんに育ててもらった女の子のお話を聞きました。成長するにつれて、その女の子はおばさんのことを「ママ」と呼び始めました。その後、女の子の両親が帰ってきました。12歳になって、その女の子が自分のことだと分かりました。

ジータ・クルツ、ホロコースト生存者

ジータはレハーク一家と10か月間、ともに過ごした。彼らの息子たちは、ジータのことを外に話さないように言われていたが、息子の友人が家に来たりしている時に、何度もジータは見られていた。当時6歳であった息子のペトル・レハークは「私はジータをベビーカーに乗せて連れ出したことがあります。私は友人と同じ速度で走ったので、ジータはベビーカーから転げ落ちてしまいました。」そして「ジータが怪我をしていないことを確認して、両親には黙っていました。」と回想している。

レーヴェンバイン夫妻は戦争から生き残り、1945年6月に赤ちゃんのジータのもとへ戻って来た。レハーク家は「諸国民の中の正義の人」として称号を与えられた。

私がやったことは、医者としての役割と人間としての私の感情から出たものです。

ヨーゼフ・ヤクシー、諸国民の中の正義の人

第二次世界大戦中、40歳の医師ヨーゼフ・ヤクシーはブラチスラバの泌尿器科クリニックの院長をしていた。彼の仕事は高く評価されており、スロバキア当局から信頼を得ていた。スロバキア人民党の創設者であるアンドレイ・フリンカの主治医でありながら、他の党員やゲシュタポ隊員も診ていた。同時に、ヨーゼフは迫害されたユダヤ人のことも積極的に助けた。

ヨーゼフ・ヤクシー

第二次世界大戦中、40歳の医師ヨーゼフ・ヤクシーはブラチスラバの泌尿器科クリニックの院長をしていた。彼の仕事は高く評価されており、スロバキア当局から信頼を得て

スロバキアにおける最初のユダヤ人に対する弾圧は、彼にも間接的に影響を及ぼした。ユダヤ人女性と結婚していたヨーゼフは、ナチスの命令に従って彼女と離婚することになっていた。しかし、彼は離婚することを拒否し、妻をブダペストに連れて行った。そこでアパートを借りて、彼女に偽造書類を用意した。そしてすぐに、ヨーゼフは彼女がスイスへの移動できるよう手筈を整えた。

ヨーゼフは地下活動にかかわりながら、迫害を受ける他の人々も支援した。ブダペストの内科部長の妻は、病院があるアパートのトイレに2年以上隠れていた。ヨーゼフは、また知り合いのユダヤ人であるスラン一家が、スロバキア国内から逃げる手助けをした。

1944年には、規模を広げて支援活動を行い、約25人を国外追放から救った。手術を口実として彼らを患者として入院させたりもした。宗教的な理由ではなく、医学的治療として割礼を受けたという証明書を男性たちに発行した。ヨーゼフは、隠れている人々を治療したり、経済的な支援、食糧援助や薬物療法を行ったり、そして偽造書類を作成したりした。

ヨーゼフ・ヤクシーは1948年に共産主義者からの弾圧を恐れてスロバキアを離れ、アメリカへ渡った。1991年、91歳の時に600人近くのスロバキア人が持つ「諸国民の中の正義の人」の称号を授与された。

ポ

ー

ラ

ン

ド

1939年9月にドイツとソ連によってポーランドが侵攻され、国は2つの占領国の間で分割された。その西部はドイツに、東部はソ連に統合され、中部地域はドイツ占領下のポーランド総督府になった。

戦前のポーランドのユダヤ人人口は約350万人であった。1939年の秋に、ポーランド総督府におけるユダヤ人に対する最初の弾圧がドイツ部隊によって行われた。占領国からの命令によって、ユダヤ人は財産の没収や、自由な移動の制限、そして強制労働が義務化された。さらに、ユダヤ人はダビデの星を着用することが義務付けられ、ゲットーに移住しなければならなかった。

1941年夏のドイツのソ連侵攻後、戦前のポーランド東部占領地区で、アインザッツグルッペン（特別行動部隊）が一般市民、主にユダヤ人の大量殺害を開始した。さらに特別行動隊司令官は、イエドヴァブネやリヴィウで、地元のポーランド人やウクライナ人をユダヤ人のポグロムに加担させた。

1942年3月、ドイツはポーランド総督府とビャウストク地区のユダヤ人を全滅させるために、ラインハルト作戦を開始した。彼らは牛車でベウジェツやソビボル、トレ布林カの絶滅収容所へ移送され、到着直後にそのほとんどがガス室で命を落とした。強制連行されたユダヤ人の運命が知られるようになると、いくつかのゲットーで蜂起が起きた。1943年のワルシャワ・ゲットー蜂起が最もよく知られた例である。

ユダヤ人は生き残るために隠れなければならなかった。彼らは「アーリア人側」、すなわちゲットーの外に避難場所を求めた。ホロコーストを目の当たりにしながらも、ドイツによる攻撃を受けたポーランド人の間では、ユダヤ人に対する組織的な殺害への対応はさまざまであった。多くの人々は受け身であり、一部の人はドイツ人と協力してユダヤ人について密告したり、金銭的利益を得るために脅迫したりした。一方で、ユダヤ人を救おうとした人もいた。そのような行為を阻止するため、1941年10月、ポーランド総督府ではユダヤ人を支援した人に対し死刑を執行し、約450人が処刑されたと言われている。

リスクがあったにもかかわらず、自分の家にユダヤ人を匿う人々もいた。彼らの行動は必ずしも見返りを求めているものではなかった。ポーランドの地下組織で、国外のユダヤ人組織が出資したユダヤ人救済委員会「ジェゴタ」がつくった体制下では、組織的な支援が行われた。カトリック教会の一部の聖職者と修道会も支援を申し出た。

ホロコーストによって300万人以上のユダヤ系ポーランド人が亡くなった。占領下のポーランドでは60,000人から80,000人しか生き延びることができず、そのうちの約30,000人が身を隠していた。

エルジュビエタ・フィツォフスカ

ヘニア・コッペルは、ワルシャワ・ゲットーで娘を出産した。子どもが生き残れるという保証がない中で、彼女は子どもを守るために地下組織と接触した。薬を使って生後6か月の赤ちゃんを眠らせ、レンガが入った木箱の中に隠して、ゲットーから「アーリア人側」へ連れ出した。箱の中には、子どもの名前と生年月日である「エルジュニア（エルジュビエタの愛称）、1942年1月5日」と書かれた銀のスプーンも入っていた。

ヘニア・コッペルは、1943年11月にポニアトヴァ労働収容所で亡くなった。エルジュビエタの父親であるヨッセルは、ワルシャワ・ゲットー解体中に射殺された。地下組織のメンバーであったスタニスワヴァ・ブーツソルド（56歳）は、助産師としてユダヤ人女性の出産を助けながら、ゲットーからユダヤ人の子どもたちを脱出させたりしていた。彼女のアパートには、ユダヤ人の子どもたちが一時的に避難していた。

もともとの予定ではなかったが、エルジュビエタはスタニスワヴァとずっと一緒に過ごした。エルジュビエタの幼少期はホロコーストの現実から離れて過ごすことができた。戦時中はドイツ人から逃れ、戦後は生き延びたユダヤ人の子どもを探すユダヤ人組織にも見つけ出されることはなかった。彼女は17歳の時まで自分がユダヤ人であることを知らなかったのである。スタニスワヴァ・ブーツソルドは「諸国民の中の正義の人」の称号を授与された。

私は母や父の写真を見たことがありません。誰も。ゲットーですべてが失われました。私の出生証明書は小さな銀のスプーンです。

エルジュビエタ・フィツォフスカ、
ホロコースト生存者

ガヴリフ家

アレキサンドラとヤン・ガヴリフ夫妻とその子どもたちは、マゾビアの村にある森林官の家に住んでいた。人々はしばしばコップ一杯の水と食べ物求めてやって来た。周辺の森に隠れるユダヤ人も同じように訪れていた。ある日、アブラム・スオムカが玄関口にまでやって来た。彼はバイオリニストであり、ワルシャワ・ゲットーから脱出した後、散髪を行っていたため稼ぎがあった。ガヴリフ家にバイオリンがあるのに気づくと、手にとって演奏した。ここに滞在し、子どもたちにバイオリンを教えるようアレキサンドラが提案すると、彼もそうすることにした。そして、誰かが来たら屋根裏部屋に隠れていた。

戦前からの友人の娘であるフリーダ・シュピングエルも、ガヴリフの家に隠れていた。ティルツァ（テレサの愛称）・ジルベルベルグと彼女の夫、ハスキエル・パピエルは納屋に隠れていたが、時々家にやって来た。

1943年3月18日の夜、ゲシュタポと私服警察に家を囲まれた。フリーダやアブラム、ティルツァと彼女の夫はすぐに逃げたが、妊娠中のティルツァは上着を取りに戻って来てしまい、庭で撃たれた。ゲシュタポたちはヤン・ガヴリフを連れ去り命を奪った。家財道具は略奪され、家には火を付けられ、バイオリンも持ち去られた。後になって、アレキサンドラは隣人の女性がドイツ人に密告したのだと知った。

ヤンとアレキサンドラ・ガヴリフ、その娘のヤドヴィガは、「諸国民の中の正義の人」の称号を与えられた6,700人以上いるポーランド人の中に含まれている。

父は、ワルシャワにはユダヤ人を助けると死刑になるという貼り紙があったと言っていました。そして突然、ゲシュタポの銃声が聞こえてきました。彼らはテレサを庭で射殺し、父も連れ出して命を奪いました。家は炎に包まれていました。村の女性が私たちに密告したのです。

ヤドヴィガ・ガヴリフ、諸国民の中の正義の人

デンマーク

1940年4月9日、ドイツ軍はデンマークに入った。ナチスはデンマーク人を「アーリア人」と見なしていたので、デンマーク占領下では脅威を感じられることは比較的少なかった。デンマーク政府は、警察と司法制度の統制を含む内政の自治権を与えられた。1943年までは「協力体制」で舵を取っていた。デンマークの君主であるクリスチャン10世は、引き続き権力を維持していた。しかし、状況は変わり、検閲が導入され、共産党のメンバーが逮捕され始め、デンマーク艦隊はドイツ軍に従わなければならなかった。

デンマークのユダヤ人コミュニティはごくわずかであった。7,800人のユダヤ人のほとんどがデンマーク人に溶け込んでいた。彼らは身分証明バッジを身につけることを強いられておらず、社会全体から分離されていなかった。国家機関は、デンマーク国民としてのユダヤ人の権利を守り続けた。しかし、ユダヤ人は待遇の良い仕事に就くことができず、彼らの仕事は明確に制約されていた。

1943年の夏に、占領当局の政策に応じて、デンマークのレジスタンスがストライキを始めた。デンマークのライヒ全権大使であったヴェルナー・ベストは、報復として「妨害行為」の処罰を要求したが、デンマーク政府は拒否した。ドイツ部隊が政府を解体して政権を握ると、すぐにユダヤ人の追放を始めた。

1943年9月初旬にナチスのドイツ部隊は、コペンハーゲンのシナゴグとユダヤ共同体の建物を没収した。会員名簿が押収されて、10月2日に大量検挙が行われた。その日は、ユダヤ人の新年であるローシュ・ハッシャーナーに当たり、ドイツ部隊はユダヤ人がその日に故郷に帰省すると目論んでいた。

しかし、差し迫った逮捕の噂がユダヤ人の指導者たちに漏れていた。情報提供者の一人であったドイツの外交官ゲオルク・ドゥックヴィッツは、ユダヤ系デンマーク人を入国させるようにスウェーデン政府と交渉した。その結果、スウェーデンは彼らの入国を許可した。それ以降、ユダヤ人はデンマーク人の支援を受けて隠れていた。

ユダヤ人狩りは10月2日に始まり、ドイツの警察は多くのデンマーク人の協力を得た。約500人のユダヤ人がドイツ部隊によって逮捕され、その多くがテレジン強制収容所に移送された。

デンマークのレジスタンスのメンバーと一部の一般人は、ユダヤ人をボートでスウェーデンの安全な場所へ送る支援をした。費用は主にユダヤ人自身が負担し、または地下組織に集められた資金で賄われた。

1943年10月末までに7,200人のユダヤ人と700人の非ユダヤ人がスウェーデンの海岸に到着した。

パイキン家

1943年9月、デンマークでユダヤ人の強制連行の噂が広まった時、アッベ・イサク・パイキンは、友人のロバート・ピーターセン（ボブ）に、自分たち家族を助けるよう頼んだ。ボブはデンマークのレジスタンスとは無関係であったが、すぐに彼らを救出する準備を始めた。そして、コーゲの町でボートを手配し、ユダヤ人をスウェーデンに連れて行くよう二人の漁師に頼んだ。デンマーク脱出直前、パイキン家は、カフェのウェイターが機転を利かせたおかげで隠れることができ、危機を脱した。

暗くなり、漁師がやって来たが、「船主の気が変わった」とだけボブに伝えた。ボブは彼らに金銭を渡して船主を酔わせ、船の鍵を盗んだ。計画は成功し、パイキン家の14人はスウェーデンに逃れることができた。その中に当時8歳であったアッベ・イサクの息子ヘニングがいた。

ボブは、パイキン家の親戚や知人を中心にスウェーデンへの脱出の手配を行い、多くの人々を支援したため、「諸国民の中の正義の人」の称号を授与された。

父に彼のような友人がいて、私たちは本当に幸運でした。しかし、ボブは友情の絆だけではなく、深い信仰心と人道的な信念から行動しました。

ヘニング・パイキン、ホロコースト生存者

トムセン家

漁村のスネッケーステンにあるトムセン家が経営していた宿は、1943年の秋にユダヤ人がスウェーデンに逃げるルートの拠点となる所であった。ユダヤ人を運ぶ漁師が、出発を待つユダヤ人と宿で落ち合っていた。宿主のヘンリー・クリスチャン・トムセンとその妻のエレン・マーグレースは、デンマークのレジスタンスの活動メンバーで、その救援ルートの手配を担当していた。彼らの13歳の息子、フランツ・エリングも救助隊に関与していた。

スネッケーステンの村人の多くが救助活動に参加していたが、それに反対する人もいた。反対する人のうちの一人が、ヘルシングルにあるデンマーク警察にその活動を知らせた。警察官が、ボートに向かって歩いているユダヤ人のグループを逮捕したが、情報提供者から安全なところまで離れると、警察官は彼らを逃した。

ゲシュタポは、ヘンリー・トムセンはレジスタンスのメンバーだと疑った。彼は尋問されたが、その証拠は見つからなかった。1944年8月の2度目の逮捕で、彼はノイエンガム強制収容所に送られ、そこで亡くなった。

地下組織の情報でドイツのパトロールがあることを知り、私たちは港に留まらなければなりませんでした。危険がないとわかると、週に2、3回外に出ることができました。私たちのボートは一度撃たれたことがあります。

ヘンリーとエレン・トムセンは何百人もの人々を助けた。彼らは個人で「諸国民の中の正義の人」の称号を授与された数少ないデンマーク人の中の2人である。なお、デンマークのレジスタンスはユダヤ人への支援を共通の認識としており、個人的に名誉を与えないようアド・ヴァシエムに要請していた。

ヘンリー・クリスチャンとエレン・マーグレースの息子、フランツ・エリング・トムセン

オ

1940年5月18日にオランダはドイツに敗れ、占領下に入った。アルトゥール・ザイス＝インクヴァルトが国家弁務官となり、オランダ行政の支配権を握った。当時、オランダには約14万人のユダヤ人が住んでいた。

人種差別の法律がすぐに制定されて、ユダヤ人から一定の権利が剥奪された。公務員や自由業での就職が禁止され、事業活動からも除外された。移動の自由が制限され、財産の没収を目的とする法律が制定された。

ラ

当初、国民はユダヤ人の弾圧に反対した。1941年2月にドイツが数百人のオランダのユダヤ人を強制収容所へ連行した際、オランダでストライキが勃発した。しかし失敗に終わり、民間人に対する弾圧が激しくなった。ドイツ部隊がユダヤ人を社会から隔離するようになると、15,000人が労働収容所に入れられた。さらに、ユダヤ人はアムステルダムに集まるように命じられ、非オランダ人または無国籍の人々は、そこから一時的に拘留するため、ヴェステルボルク通過収容所に送られた。地方に住む人々はブフトの収容所に隔離された。

さらなる規制は、ユダヤ人の身分証明書に「J」の文字を追記させ、1942年5月以降、すべてのユダヤ人はダビデの星のバッジを着用しなければならなくなった。これらの新しい命令に対する抵抗のしるしとして、オランダ市民の多くは黄色い花で衣服に印を付け、ロッテルダムの壁にはユダヤ人との連帯を公に呼びかけるポスターも見られた。

1942年6月中旬、オランダ司教の抗議にもかかわらず、絶滅収容所へ向かうユダヤ人の最初の列車がオランダを出発した。しかし、同じ年の9月までに、オランダ人の協力を得たドイツ部隊は10万人を超えるユダヤ人を強制移送して、その半分以上がアウシュビッツ強制収容所へ送られた。

オランダの地下組織、聖職者、および一般市民がユダヤ人に支援を申し出た。ドイツ当局はこうした活動に対して、逮捕や懲役刑、強制収容所へ連行するなどを行った。

ン

多くの人々の尽力の結果、約35,000人のユダヤ系オランダ人が戦争を生き延びた。しかし、近隣諸国と比較するとユダヤ人の死者の数は多かった。ユダヤ人の国外脱出を困難にした国の地理的状況や、ユダヤ人を追うドイツ部隊の非情さ、オランダの警察と行政の職員そして民間人の一部が、ナチスのドイツ部隊に協力したという事実を組み合わせた結果とも推測される。

ダ

クラウド・ビクター・ボック

クラウド・ビクター・ボックは、オランダ人画家のジゼル・ファン・ウォータースコート・ファン・デル・グラヒトの阿姆斯特ダムの家に隠れていたユダヤ人生徒の一人であった。その小さなコミュニティの中では芸術や詩、文化に満ちた活動のおかげで、恐怖の中でも平常心を保つことができた。

1912年生まれ、ジゼルは、ドイツがオランダを占領した時、画家として初めて成功し第一歩を踏み出したところであった。彼女は、ドイツで文化・芸術・報道方面の統制を行った機関である帝国文化院に登録していなかったため、アーティストとして公式に活動することができなかった。

ユダヤ人狩りの計画について聞いた時、ジゼルはすぐに追放されたドイツの詩人、ヴォルフ・ガング・フロメルと彼のユダヤ人の友人たちの隠れ家として、彼女のアパートを提供した。「私はこの子どもたちが鶏のような扱いを受けているのを見ていることができませんでした」と彼女は数年後に語った。1942年以降、マックス・ベックマンやエエピとアドリアーン・ホルストなどのアーティストの友人の助けを得ながら、秘密工作を行い、コードネーム「カストラム・ペレグリニ」を使って任務をこなしていた。

戦後、ジゼルが隠れ家として調達した建物は、戦時中のコードネームが付けられた文化センターとなり、今日まで活動している。ジゼルは「諸国民の中の正義の人」に認定されている。

私たちが詩を書いている限り、何も起こりません。

クラウド・ビクター・ボック、ホロコースト生存者

ボガード家

ヨハネス・ボガードは、オランダ北部のニュー・フェネップの村のカルバン派を信仰する家庭で育った。彼の深い信仰心は、ドイツの占領中に迫害されたユダヤ人を助ける動機となった。

ヨハネスは家族とともにユダヤ人をボガード農場に匿うと、もっと多くの亡命者を助けるために、阿姆斯特ダムへ向かった。彼は地元の農業コミュニティ内で、隠れ家や偽造書類、金銭、食料を調達した。彼はオランダのレジスタンスのメンバーにも支援を申し出た。

1942年の終わり頃にドイツ人が農場を襲撃したことで、11人のユダヤ人が捕まった。ヨハネスの父親は10週間投獄された。ボガード一家はそれでも使命を果たし続けた。

1943年の秋にドイツ人が再びやって来ると、34人のユダヤ人を見つけ出し逮捕した。この襲撃は、隠れていた逃亡者の一人がオランダ人SS（ナチス・ドイツ親衛隊）の男を殺害したことに対する報復であった。多くは襲撃から生き延び、干し草の中に潜んでいた人もいた。しかし、その頃ヨハネスの父親は兄妹と一緒に連れ去られた。その後まもなくして、ヨハネスの妻クラシェも密告されて逮捕されたが、ヨハネスは身を隠しながらユダヤ人を支援し続けた。

1941年から1943年まで、ボガード農場とその周辺に約200人が隠れていた。ヨハネス・ボガードと彼の兄弟は「諸国民の中の正義の人」の称号を授与された5,500人以上のオランダ人の中に含まれている。

ユダヤ人に起きていることを私と同様に仲間の同国人が目撃していたら、きっと彼らはもっと行動したでしょう。

ヨハネス・ボガード、諸国民の中の正義の人

1940年6月のドイツのフランス侵攻後、国はドイツの直接支配下に置かれた北部とヴィシー政府管轄下の南部の2つの区域に分割された。

北部には約35万人のユダヤ人が住んでいた。彼らの一部は難民であった。弾圧を恐れて、多くのユダヤ人は安全だと思われたフランス南部に移った。ドイツに編入されたフランス領からも多くの人々が南へ追放された。戦争は何か月も続き、何千人ものユダヤ人が、1940年以来イタリアの占領下にあったフランス南東部の小さな地域に避難した。イタリア当局は反ユダヤ法の施行を拒否していた。

1940年以降のフランスでは、北部南部ともに、経済面や雇用の制限および社会活動に関する規制や人種差別も見受けられた。

ヴィシー政府は1940年10月と1941年6月にユダヤ人を対象とする独自の法律を発表し、フランスの両地域と海外領土に義務づけるユダヤ人規定 (Statuts des Juifs) を施行した。その法律はユダヤ人の起源を決める基準を定め、ユダヤ人が公務員や文化に関連する職業で働くことを禁じた。1942年5月下旬、ドイツ占領下のフランスのユダヤ人は、ダビデの星のバッジを着用するように命じられた。非ユダヤ系フランス市民の多くは、彼らの服にそのようなバッジを付けさせる行為に対して抗議した。

フランスからのユダヤ人の大量強制連行は1941年に始まり、フランスの警察と鉄道当局が行った。当初、ユダヤ人はフランスに位置したドランシーやピティヴィエのような通過収容所へ送られて、そこからアウシュビッツ強制収容所へ送られた。

1942年7月16日から17日にドイツ部隊はヴェロドローム・ディヴェール大量検挙事件として知られるフランスで最大のユダヤ人狩りを行った。フランス警察同行のもとで約13,000人のユダヤ人がパリで逮捕され、通過収容所に収容されてからアウシュビッツ強制収容所へ送られた。

南フランスは1942年末にドイツ占領下に置かれた。フランス警察の管理下で通過収容所に収監されていた数千人のユダヤ人が、「東」へ追放された。1944年8月までに、約75,000人が強制収容所また絶滅収容所へ送られた。

比較的軽い罰金刑から強制収容所への投獄も含んだ罰が課せられていたにもかかわらず、フランス市民の一部はユダヤ人を救うことを積極的に支援しようと決意した。個人で、または民間人、ユダヤ系地下組織や非ユダヤ系組織、あるいは教会によって、20万人を超えるユダヤ系フランス人がホロコーストを生き延びた。

エリザベス・ドリリッヒ

13歳のエリザベス・ドリリッヒは、1940年5月に両親とともにベルギーを出た。彼らはヴァランスの近くの長くプロテスタントの伝統が根付く地域に避難した。一家は、サン・ローラン・パップ(アルデシュ県)のローランド・ターティエ牧師とマゼット・サン・ボイ(オート・ロワール県)のマルセル・ジャネット牧師による支援を受けた。偽造書類を渡されたドリリッヒ家は、ル・シャンボン・シュル・リニョン高原にあるオート・ロワール地域のいくつかの村に住み、エリザベスは学校に通うことができた。

代々、異邦人を受け入れてきた伝統がある高原で、村々がユダヤ人の避難場所になった。アンドレ・トロクメ牧師と妻のマグダは、支援活動を積極的に行っていた。マグダは、里親家族を見つけ、寄宿学校に支援を求める任務を担っていた。「(ユダヤ人を助けることに対して)町全体で意見が一致していました。」と彼女は言った。1943年2月に逮捕され、その後釈放されたトロクメ牧師はレジスタンスに加わり、ユダヤ人を保護し続けた。

1940年から1944年の間に、2,500人のユダヤ人がル・シャンボン・シュル・リニョン高原に一時的に滞在したと言われている。これらの大規模な支援活動と支援に携わった人々の数の多さから、フランス全土では珍しく、村そのものが「諸国民の中の正義の人」に選ばれた。

私たちは素晴らしい人たちに恵まれました。母はある男性に、私たちがユダヤ人だと話しました。そうすると彼がどうしたかわかりますか。彼は家賃を下げてくれたのです！

エリザベス・ドリリッヒ、ホロコースト生存者

ルシエン・クレメン・デ・レピン

30代のごく普通の女性、裁縫士であり8歳の男の子の母親であるルシエン・クレメン・デ・レピンは、ユダヤ人の運命に憤慨した。1942年、隣人のユダヤ人の依頼で、彼女はユダヤ系ポーランド人が収容されていたコンピエーニュの収容所に小包を届けた。そこで見たものに彼女はショックを受けた。彼女は、ユダヤ人秘密女性組織のWIZO会と連絡を取り、強制連行や処刑から子どもたちを救う仕事を始めた。「クレメン夫人」と呼ばれた彼女は、子どもたちをパリから西方のサルト県の農場に連れて行った。2年間で150人以上の子どもを救った。クレメン夫人は子どもたちと一緒に旅をし、彼らを助けてくれる看護師を雇った。ほとんどの場合、農場で子どもたちの世話をしていた人々は、彼らがユダヤ人であることを知らなかった。クレメン夫人は、匿った子どもたちがきちんと世話されていることを確認するため、村から村へ訪ね歩いた。

クレメン夫人はドイツ人に2度逮捕されたが、「生徒」にプライベート・レッスンをしている教師だと納得させていた。彼女は教育日誌を付け、子どもたちの出席簿を保管していた。戦後、彼女は子どもたちを集めてWIZO会に戻すという使命を果たし続けた。

ルシエン・クレメン・デ・レピンは、「諸国民の中の正義の人」の称号を授与された約4,000人のフランス人のうちの一人である。

「あまりにも理不尽だわ!」と、ユダヤ人の運命を息子に何度も話していました。

ルシエン・クレメン・デ・レピン、
諸国民の中の正義の人

ル

第二次世界大戦の勃発後、ルーマニアは中立を宣言した。ソ連やハンガリー、ブルガリアからのルーマニア領土に対する修正主義者の要求によって、ルーマニアは1940年秋までに国土の3分の1を失った。第二次ウィーン裁定（ドイツとイタリア間での条約）の直後、カロル二世は退位を余儀なくされて、息子のミハイ一世に譲位した。イオン・アントネスク元帥とファシスト党の鉄衛団のもとで連合政府が結成された。国民軍国（the National Legionary State）として知られた新体制は、ドイツの同盟国であった。

1

戦前のユダヤ系ルーマニア人の人口は75万人以上であった。国家が枢軸国に加わる前から、政権は反ユダヤ政策を打ち出していた。独ソ不可侵条約（モロトフ＝リッペントロップ協定）の結果として、ルーマニアは領土の一部をソ連に割譲しなければならないようになった。1940年の夏に、地元の住民によるユダヤ系ルーマニア人へのポグロムが始まった。ユダヤ人はソ連に協力しているとの口実で攻撃された。同じ年の後半には、ファシスト政権のもとで反ユダヤ政策も実行され、多くのユダヤ人が犠牲になった。

1941年1月に、鉄衛団が政治的同盟者に反対しクーデターを企てた。その結果、ブカレストのポグロムで120人以上のユダヤ人が犠牲になった。数日以内にアントネスク元帥はクーデターを鎮圧して、鉄衛団を政府から追い出した。クーデターに関与した人の一部が逮捕されて有罪判決を受けた。

マ

ルーマニアは1941年6月にドイツのソ連侵攻に参戦すると、ベッサラビアと北ブコヴィナの領土を再併合して、トランスニストリアを占領した。6月の終わりに、ルーマニア当局はヤシの街でユダヤ人民衆に対するポグロムを行い、ソ連との協力を再び口実にして13,000人の命を奪った。1941年の終わりまでに、ルーマニアの軍と憲兵隊は、アインザッツグルッペD（特別行動部隊）や地元住民の一部と協力して、ベッサラビアおよび北ブコヴィナのユダヤ人60,000人を殺害した。1941年の夏、残っていたユダヤ人は、トランスニストリアのゲットーと収容所に強制連行された。殺害や強制労働、気象条件、飢餓および病気のため、約12万人のユダヤ人が亡くなったと言われている。さらに、25,000人を超えるロマがアントネスク元帥の指示で強制連行された。

ニ

1943年半ばにユダヤ系ルーマニア人をポーランドの絶滅収容所へ強制連行する計画が立てられたが、アントネスク元帥の政策が変わって輸送は行われなかった。戦争の成り行きが不透明な中で、彼は政治的そして経済的行動を目論んでいた。

一握りの知識人やルーマニア正教会の教会員、ルーマニア王室の代表や外交官たちが反ユダヤ政策に抗議した。ユダヤ人を救出した一般人の例がいくつかあるが、そのような行為は政権によって罰せられた。

1941年から1944年の間に、ルーマニア当局はドイツ軍とSS（ナチス・ドイツ親衛隊）の支援を受けながらルーマニア支配下の領土において、28万人から38万人のユダヤ系のルーマニア人やウクライナ人の命を奪った。そして、およそ37万5,000人のユダヤ系ルーマニア人が戦争を生き延びたと推定されている。

ア

マグダレナ・ストロー

マグダレナ・ストローは、彼女が住むトランシルバニア地方の都市、クルージュ・ナポカがハンガリーの統治下に置かれた時、15歳であった。ユダヤ人の女の子ハンナ・ハンブルクは、マグダの新しいクラスメートの一人であった。2年後の1942年、ハンナはユダヤ人学校に転校したが、彼女たちの友情はずっと続いていた。

1944年の春にドイツがハンガリーに侵攻した直後、その権力下で暮らすユダヤ人の強制連行が始まり、コロジュヴァールのゲットーに移動しなければならなかった。彼らは、わずかな荷物しか持って行くことを許されなかった。マグダはそれを目撃した。「彼らが家を追い出されて、スーツケースを1つしか持ち出せないのは悲劇でした」と、戦後彼女は回想した。

ハンナはマグダに別れを告げるために出かけた。強制連行から逃れる唯一の方法は、ハンガリーでハンナの母親と同じ名字になることを認める「アーリア系」の身分証明書を入手することだとハンナは言った。マグダはハンナからそれを求められたわけではなかったが、安全に逃れることができるよう、自分の出生証明書と洗礼証明書を渡した。

マグダはソ連軍が来るまで何か月も身分証明書を持たずに暮らしていた。身分証明書を持たずに道を歩くことは、命にかかわる危険を引き起こす可能性があったので、家から出ることができなかった。彼女にあった唯一の書類は、外出の時に持参した中等教育の証明書であった。それでも制服を着た男が遠くにいるのを見ると、身震いした。

マグダとハンナは二人とも戦争を生き延びた。ハンナは数週間だけクルージュ・ナポカに戻り、その後ブダペストに引っ越した。

マグダレナ・ストローは「諸国民の中の正義の人」の称号を授与された60人以上のルーマニア人のうちの一人である。

あなたは自分を守るだけのために誰かに身分証明書を要求して、代わりにその人を死刑にすることはできません。それを求めることはできませんが、そうしようと申し出ることはできます。だから私は自分の身分証明書を彼女に渡しました。

マグダレナ・ストロー、諸国民の中の正義の人

アンドレイ・カララシュ

アンドレイ・カララシュが19歳の頃、学校に通いながら10代を過ごしたイアシの街は、イオン・アントネスク元帥の直接的な指示で地元当局が企てた悲劇の舞台になっていた。1941年6月28日にボグロムが始まり、ルーマニアの兵士、警察や地元の暴徒によって路上で何千人ものユダヤ人が殺害された。翌日から、さらに多くのユダヤ人が通過収容所に連行するため、列車に乗せられた。

「ユダヤ人全員外へ出ろ!」という声が、アンドレイ(当時はバーナードと呼ばれていた)と彼の父親であるザルマングルーパー、弟のポールに聞こえた。彼らは家を出るとすぐに警察署に連行された。途中で歩道に死体が横たわっているのが見えた。夜になって、3人は他の100人以上の人々と一緒に列車の中に閉じ込められた。

過密状態で、列車は一週間同じ方向に、その後、反対方向に動いていた。貨車の中に押し込まれた人々は身動きができず、食べ物や水もなかった。「私は父と弟の尿を飲み、そして彼らは私の尿を飲みました。」アンドレイの親戚を含む多くの人々が亡くなった。

列車はロマンの街に止まった。地元の赤十字の責任者のヴィオリカ・アガリチは、兵士に軽食を提供するために駅にいた。列車の中に閉じ込められていた人々の恐ろしい呻き声を聞き、人々が外の空気を吸えるよう、駅の警備員に車両を開けるよう言い放った。車両を開けると死体と、かろうじて生きていた人々が外へ転げ落ちた。アンドレイはそのうちの一人であった。ヴィオリカは死体を運び出し、残りの人々に旅の道中用に食料と水を与えるように求めた。多くの人々が彼女の援助で生き残ったが、それをルーマニア当局から評価されることはなく、彼女はその後すぐ地元の赤十字を解雇された。

アンドレイは労働収容所へ移送されると、そこで3年間働いた。戦後、彼は劇場と映画監督で成功を収めている。ヴィオリカ・アガリチは「諸国民の中の正義の人」として認定された。

私の作るコメディで、みんなを笑わせ、幸せにしたかった。しかし、心の奥底では悲しみに満ちていました。悲しくてたまらないのです。

アンドレイ・カララシュ、ホロコースト生存者

ク

ロ

ア

チ

ア

1941年4月6日、ドイツとその同盟国はユーゴスラビアを攻撃した。ドイツやハンガリー、イタリア、ブルガリアの間で国土の一部が分割された。残りの領土は、セルビアとアンテ・パヴェリッチが率いるクロアチア独立国家 (NDH) のものとなり、枢軸国側に加わった。ドイツ部隊に協力したクロアチアのプロファシスト活動団体ウスタシャによって権力が行使された。1942年10月までに、NDHは主にユダヤ人に対する多くの反マイノリティ法を可決した。当時のユダヤ人コミュニティの数は約40,000人であった。1941年4月30日、人種的アイデンティティ、アーリア人の血統の維持、クロアチア国家の名誉の保護に関する三つの法律によって反ユダヤ特別法が施行された。ユダヤ人はダビデの星のバッジの着用を強いられた。彼らは移動の自由を制限されて、財産は没収された。しかし、異民族間で結婚生活を送っている人など、一部のユダヤ人はそれほど厳しく制限されていなかった。

「NDHにユダヤ人の居場所はない」というスローガンが掲げられるとウスタシャをはじめ、一般のクロアチア人によって攻撃が行われた。しかし、できる限りユダヤ人を助けようと個人的に避難場所を提供した人々もいた。そのような人々は、強制収容所行きなどの罰の危険を冒してまで支援しようとした。占領初期、ユダヤ人は自力で、もしくはクロアチア人に助けられながら、イタリアが併合したユーゴスラビアにある一部のユダヤ人コミュニティに逃れた。彼らは1943年9月（イタリアの降伏）まで、比較的危険のない状況で生活をおくることができた。

1941年6月初旬、NDHに共産主義者や政治犯、セルビア人、ロマ、ユダヤ人のための強制収容所が設立された。それらの一つはクロアチアで最大の収容施設、ヤセノヴァツ・スタラ・グラディシュカ収容所であった。1941年末までに、NDHのユダヤ人人口の半分以上が地元強制収容所に投獄された。

1942年8月、ドイツ部隊は約5,000人のユダヤ人をドイツの絶滅収容所、主にアウシュビッツ強制収容所へ移送し始めた。1943年5月には、2度目の多くの人々の強制連行があった。それ以降で、クロアチアに残ったユダヤ人は、異民族間の結婚によって生まれた人と非ユダヤ人と結婚した「半ユダヤ人」を含む「名誉アーリア人」だけであったが、隠れていた人々が少なからずいた。約7,000人から9,000人のユダヤ系クロアチア人が戦争を生き延びたと言われている。

ディーナ・ビュフラー

1942年の初め、ザグレブのユダヤ人組織のセンターに小包が送られてきた。中には1歳半の女の子がいて、首に名前や生年月日と組織のメンバーの一人であるブランカ・ズィッツァー・フルストのもとに連れて行ってほしいと書かれたカードがかかっていた。その少女ディーナ・ビュフラーは、ロボルグラード収容所に投獄されていたブランカのいとこの娘であった。

ブランカは抵抗活動に専念していたので、子どもを世話することができなかった。最初に、一人の女性にディーナを預けたが、彼女は十分な世話をしてくれなかった。結局、ブランカは戦前の旧友であるディーナ・ペリティチに助けを求めることにした。ディーナがその少女を見ると、栄養失調で身なりも汚れていることがわかった。ザグレブの郊外にあった家に少女を連れて帰り、息子のティホミルの助けを借りて少女の世話をした。少女は外部から遠ざけられて家からほとんど出なかったが、隣人たちはユダヤ人の子どもについて噂し始め、ディーナと

ティホミルを密告すると脅した。安全のために、少女は洗礼を受け、終戦まで偽の身分証明書で生きていた。それから少女はブランカのもとに戻り、イスラエルへと渡った。

ディーナとティホミルは「諸国民の中の正義の人」の称号を授与された。

ユダヤ人だった私は、家で軟禁されているようでした。外出はせず、他の子どもたちにも会いませんでした。通りを歩く時はいつもディーナの手を握っていました。それは約3年間続きました。

ディーナ・カーン・ビュフラー（旧姓）
ホロコースト生存者

ドリナル兄弟

ジャルコ・ドリナルは、ザグレブ在住で受賞歴がある人気卓球選手で、マッカビのユダヤスポーツクラブで卓球のコーチとして働いていた。1941年にウスタシャが権力を掌握すると、ジャルコは身分を利用してユダヤ人を支援することができた。有名なスポーツマンとして、彼は公式のイベントや高官の事務所に招待された。そこで兄のボリスと一緒に空白の身分証明書と公式の印鑑を盗み、ユダヤ人の友人のために偽の身分証明書を作成していた。

ジャルコの支援を受けた人の中には、スポーツクラブ出身の元実習生であり、強制収容所に移送されることになっていたゲルション・アプフェルがいた。ジャルコは自分の家にゲルションを匿い、ハンガリー統治下にあった領土（反ユダヤ人の政策が比較的緩和されていた地域）への移動に必要な書類をゲルションに渡し、そして最後に駅で見送った。

1941年6月にザグレブでユダヤ人狩りがあった時も、ドリナル兄弟は活発に行動した。当局はこの兄弟がユダヤ人を支援していると疑ったが、ドリナル兄弟は約300人を助けた。彼らは「諸国民の中の正義の人」の称号を授与された、100を超えるクロアチアの団体の中に含まれている。友人をはじめとして多くのユダヤ人のために、ボリス・ドリナルと彼の弟ジャルコは渡航許可証と身分証明書を手配した。

世の中には良い人も悪い人もいます。競い合うのではなく、無知とあらゆる過激思想を学び、そしてそれを抑えることを学ばなければなりません。私たちは、この不公平な世界で1つのことと戦っています。つまり世界はそうあるべきなのです。

ジャルコ・ドリナル、諸国民の中の正義の人

第二次世界大戦勃発後、リトアニアはソ連の衛星国になった。1940年6月にソ連は軍事基地をリトアニアの領土に置こうとしていた。それが拒否されると、ソ連はリトアニア国家の占領へと動いた。

占領下で約21万人のユダヤ人を含む一般市民が、ソ連奥地への強制連行や、民間企業の没収などの弾圧的措置の対象となった。

1941年の夏の独ソ戦勃発後に、ドイツの統治下に置かれると、カウナスに首都を置くリトアニアは軍事後方支援として東部占領地域に編入された。ドイツ軍に続いて、アインザッツグルッペン（特別行動部隊）がやって来た。司令官たちは共産主義者やユダヤ人、ロマを「排除する」ように指示された。ユダヤ人はリトアニア人にも攻撃された。当初、ユダヤ人は共産主義者、あるいはソ連当局者やその支持者であるという口実のもと、ユダヤ人であるというだけですぐに迫害された。1941年6月にドイツ部隊に扇動されて起きたカウナスのポグロムで、3,800人の命が奪われた。

1941年末までに、ドイツ部隊はリトアニア警察と警察予備大隊の協力のもと、約13万人のユダヤ人を射殺した。ユダヤ人は220ある大量殺戮地点で殺害された。カウナス砦とヴィリニユスのパネレイの森での殺害が最大規模のものであった。

残ったユダヤ人は、リトアニア最大のゲットーであったヴィリニユスをはじめ、カウナスやシャウレイ、シュヴェンチョニースのゲットーに閉じ込められた。そこに集められた人々は自由行動を禁止され、財産は没収された。ユダヤ人はダビデの星を服に付けるように命じられもした。1944年の夏までにリトアニアのすべてのゲットーが解体され、ユダヤ人はその場で射殺、または絶滅収容所へ送られたり、強制収容所や労働収容所に投獄されたりした。リトアニアの人々はホロコーストに対して、様々な見方をしていた。無関心な人もいたが、警察だけではなく、多くの人々がドイツ部隊に協力して、リトアニアにおけるユダヤ人の大量殺害に加担した。しかし、死刑を含むドイツによる厳しい罰があったにもかかわらず、個人的にユダヤ人を支援した人もいた。

およそ9,000人のリトアニアのユダヤ人が戦争を生き延びたと言われている。強制収容所や労働収容所に収容されたり、森の中に隠れてパルチザン活動に加わった人もいた。そして、リトアニア人の支援で助かった人もいた。

ショチョット家

イエホシュア・ショチョットは、人口の半分がユダヤ人の小さな町テルシアイに、母親と1歳半の弟ハヤムと住んでいた。少年たちはリトアニア人の乳母、ドミツェレ・パゴユテに育てられた。独ソ戦が勃発した時、イエホシュアはちょうど7歳であった。

ショチョット一家は、収容所やナチス・ドイツと地元民によって作られたテルシェイ・ゲットーで過ごした。ショチョット家は、1941年後半のゲットー解体後から隠れ家での生活に入った。

ドミツェレがショチョット一家を助けに来た。彼女はショチョットの家にあったクリニックで看護師として働きながら、そこに住んでいた。ゲシュタポのオフィスが通りの真向かいにあり危険であったにもかかわらず、彼らをそこに匿った。ドミツェレは親戚や友人の積極的な支援を得ながら、多くの村で次々と避難場所を

調達し、できる限り何度も一家を訪問した。一家は12回以上も避難場所を変えなければならず、その間、母親は22か所もの隠れ家にいた。一家は全員、戦争を生き延びた。ドミツェレは元雇用主の孫娘であったレイチェル・タイツ・ズィンゲルへの支援も行った。ショチョット一家を助けたドミツェレをはじめとした13人は「諸国民の中の正義の人」の称号を得た。

私はユダヤ人学校のクラスメートの中で唯一生き残りました。戦時中、私は非合法的な生活をおくり、15か所の隠れ家を転々とししました。ドミツェレと他のリトアニア人の多大なる支援と勇敢で献身的な行動があったからこそです。

イエホシュア・ショチョット、ホロコースト生存者

ソフィヤ・ビンキエネ

「騒々しい場所であったに違いありません。街で最も洗練された家の一つでした」。カーマ・ギンカスは、ドイツ占領中に住んでいたところにあったピンキス家のアパートを覚えている。ジャーナリストのソフィヤ・ビンキエネと、その時重い病気を患っていた夫であるリトアニアの詩人カジスは、カウナス・ゲットーからの避難者に家を開放した。ソフィヤの娘リリハナとイレーナ、バイオリニストであるリリハナの夫ヴラダス・ヴァルチカスもユダヤ人への支援にかかわっていた。

彼らのアパートは、ドイツ人の住居に囲まれていたが、ピンキス家は別の安全なところが見つかるまで、誰にでも避難場所を提供した。長期にわたって滞在する脱走者もいた。親しみやすい雰囲気から、皆が勇気と希望を持つことができた。地下抵抗活動は、1941年6月から1944年のドイツ占領終了まで3年続いた。ソフィヤ・ビンキエネとその家族、カジス・ピンキス、リリハナ・ピンキテ・モズリウニエネ、イレーナ・ナセビシウテ・ダミホナイティエネ、ゲラルダス・ピンキス、エレオノラ・ピンキテ、ヴラダス・ヴァルチカス、ナタリヤ・リケヴィチエネは、「諸国民の中の正義の人」と認定されているおよそ900人のリトアニア人に含まれている。

カウナスの通りで、ドイツ人は辛うじて生きている戦争捕虜の群れや胸に黄色の星を付けた人たちに銃剣を向けていました。何をすれば、どう生きていけばいいのか。一つだけ分かったことがあります。何もしないで見ているだけなんてできませんでした。何かどんなことでもやらなくては、と。でも何を。どうやって。

ソフィヤ・ビンキエネ、諸国民の中の正義の人

ウ

1939年のソ連のポーランド侵攻について、東ガリツィアとして知られる東部領土の一部がウクライナのソビエト社会主義共和国に編入された。1941年6月にドイツがソ連を攻撃後、占領されたウクライナの領土はドイツの軍事政権下に置かれ、東ガリツィアは総督府に組み込まれた。

ク

ナチスは、占領地でユダヤ人を弾圧した。ユダヤ人はダビデの星のバッジを服に付けて、家にもダビデの星の印を掲げるように命じられた。財産は没収され、移動が制限され、強制労働に駆り出された。1941年の夏から秋にかけて、ユダヤ人は占領部隊による迫害を受け、ウクライナ人が企てたボグロムの犠牲になった。1941年7月にリヴィウで起きたボグラムが最も悲劇的であった。時には、国家の独立を求めてドイツを頼りにしたウクライナ民族主義者組織（OUN）が協力したこともあった。

ラ

バルト諸国やベラルーシと同様に、ユダヤ人はアインザッツグルッペン（特別行動部隊）に処刑され、犠牲者自身が掘った「死の穴」に葬られた。ウクライナ警察と準軍事組織が殺害に加担した。1941年9月に行われたバビ・ヤールの虐殺が最大規模で行われた処刑の一つであった。

生存者はゲットーに監禁されたが、まもなくゲットーは解体された。1943年の秋までに、アインザッツグルッペン（特別行動部隊）やドイツ軍、ウクライナ警察予備隊は、ウクライナのユダヤ人人口のほとんどを殺害した。主に東ガリツィアのユダヤ人で、およそ34万5,000人がドイツの絶滅収容所に強制連行されて、命を奪われた。

1941年の独ソ戦勃発の前に、数十万人のユダヤ人がソ連へ移送され、終戦までそこに留まった。ドイツの労働収容所や強制収容所から生き延びたユダヤ人もいれば、地元のパルチザン部隊に加わったユダヤ人がいたり、厳罰の危険を冒してまで、支援を申し出るウクライナ人によって救出されたユダヤ人もいた。

東ガリツィアで20,000人から26,000人、ヴォルギーニで5,000人ほどのユダヤ人が生き延びたと言われている。その後、ポーランド人によって匿われたユダヤ人の一部は、ウクライナの反乱軍（UPA）の犠牲となった。

イ

ナ

スモレンスキ兄弟

放浪を経て、疲れきったユダヤ人の兄弟2人、15歳のミハイル・スモレンスキと5歳の弟グリゴリーは、ボルタヴァの街からさほど遠くないベロツェルコフカ村にたどり着いた。1941年11月のことであった。

彼らは、1か月以上前にドイツのユダヤ人狩りで捕まってバビ・ヤールに強制連行されたが、なんとか逃げ出してきた。ドイツ部隊は、バビ・ヤールで数千人のユダヤ人を射殺したが、その中に兄弟の母親もいた。父親は1941年の夏から出征していた。兄弟は孤独であった。家に戻ってもそこにいることはできず、どこかへ行く当てもなかった。

ベロツェルコフカ村の人々は兄弟を歓迎して食事を与えたものの、寝床を提供したのは、オクサナ・セメルゲイという1人の女性だけであった。翌朝、彼女は弟のグリゴリーに自分のもとに留まるよう勧めた。

村の人々は、オクサナが兄弟を泊めたことを知っていた。これが村全体の脅威となることを危惧して、多くの人が反対した。

誰かがオクサナを密告したため、彼女の夫ニキータが逮捕された。彼を釈放するためには、グリゴリーがユダヤ人ではないという証明をしなければならなかった。そして、オクサナは50人分の署名を集めなければならなかった。彼女は隣人の助けを求めて家々を歩き、ようやく十分な数の署名を用意することができた。

少年はセメルゲイ家に残ると、彼らの息子として扱われた。そして1943年の終わりに実の父親やミハイルと再会することができた。オクサナとニキータ・セメルゲイは「諸国民の中の正義の人」に認定された。

私たちは、空腹で弱りきり、凍えながら歩き回っていました。それでも前に進まなければなりませんでした。もしオクサナが自分たちを連れて行ってくれなかったら、生き延びることはできなかったかもしれません。彼女は、私たちを風呂に入れてくれて、衣服を提供してくれるだけでなく、傷口に包帯を巻いてくれました。

ミハイル・スモレンスキ、ホロコスト生存者

ゲシュタポが取り立てのために家々を回っていました。私の妻にパスポートがないことが分かり、彼らは彼女を逮捕しようとしました。そこに居合わせた何人かが彼女の身元を証明して、ゲシュタポに見逃してもらえよう頼み込みました。

アレクセイ・グラゴレフ、諸国民の中の正義の人

タチアナは、イザベラに自分の身分証明書と洗礼証明書を渡した。しかし、その親切な行為によって、タチアナの人生は一変した。ドイツ部隊が調べ上げ、彼女が身分証明書を持っていないことが知られたのである。

数週間後、イザベラは再び助けを求めた。彼女はグラゴレフ家と一緒に住んでおり、彼らは親戚だと主張すると、すぐに娘のイリーナを連れて来た。イザベラとイリーナは、安全のため、しばらくの間、教会の鐘楼に隠れなければならなかった。グラゴレフ家は他のユダヤ人も助けた。ユダヤ人を自宅に匿うか、信頼できる教区の人々をお願いをした。彼らには偽の洗礼証明書を与えた。アレクセイやタチアナ、マグダリーナ、ニコライは、「諸国民の中の正義の人」の称号を与えられた2,500人のウクライナ人の中に含まれる。

グラゴレフ家

占領期に正教会の司祭であったアレクセイ・グラゴレフは、キエフ郊外のポクロフ教会に配属された。彼は妻のタチアナと10代の子どもたち、マグダリーナやニコライと一緒に住んでいた。1941年の秋に、アレクセイの義理の妹マリヤ・イェゴリチェヴァが、兄の妻でユダヤ人のイザベラ・ミルキナをこれ以上匿うことができなくなり、彼女を助けてくれないうかと頼みに来た。

1919年以降、ハンガリーの政治指導者は権威主義者のミクロス・ホーシー提督であった。第二次世界大戦が勃発する前から、ハンガリーとドイツは同盟国であった。1938年から1941年の間に、ユダヤ人を国の経済的生活から排除して、自由を制限する反ユダヤ法が制定された。

1941年にハンガリーは枢軸国の軍事作戦に関与した。当時、約86万人のユダヤ人がハンガリーと併合された領土に住んでいた。ユダヤ人は、政府のさらなる差別政策の標的となった。

ハンガリーでは、1941年にユダヤ人に対する最初の大事件が起きた。「外国出身」のユダヤ人がソ連領のカームヤネツィ・ボジーリシクィイに強制連行されて、最終的にアインザッツグルッペン（特別行動部隊）に殺害された。

その後、1942年にハンガリー兵士が約700人のユダヤ人と2,500人以上のセルビア人をノヴィ・サド（ハンガリー占領下にあったセルビア北部）で殺害した。この時はまだ、ユダヤ系ハンガリー人は比較的安全であったため、ドイツに占領された多くの国のユダヤ人難民にとって、ハンガリーが安全な避難場所になっていたことは事実である。

ドイツ占領下に置かれた1944年、ハンガリーの状況は劇的に変わった。親独派のストーヤイ・デメが首相になり、厳しい反ユダヤ政策を実施した。

ブダペスト郊外のユダヤ人はゲットーに閉じ込められ、1944年4月から7月の間にSS（ナチス・ドイツ親衛隊）の上級将校アドルフ・アイヒマンの命令で、アウシュビッツ強制収容所へ移送された。43万7,000人の強制連行者のほとんどが、収容所に到着してすぐにガス室で非業の死を遂げた。1944年7月6日にミクロス・ホルシーはハンガリー発の移送を一時停止した。フェレンツ・サラシ新首相の命令によって、10月からユダヤ人労働者はドイツ国境まで徒歩で連行されると、主に要塞化に取り組むための労力として引き渡された。

1944年11月に約70,000人のユダヤ人がブダペストのゲットーに閉じ込められ、多くの人が風邪や飢え、病気で命を落とした。30,000人のユダヤ人が「労働隊」に徴用され、ドイツへ移送された。一方、中立国の外交官は、特権を行使して「国際ゲットー（通称）」を設置し、約20,000人のユダヤ人をそこに住まわせ保護した。偽の身分証明書を使用したり、ブタペストで他に隠れていた35,000人ほどの人々を含む、約25万人のユダヤ系ハンガリー人が戦争を生き延びたと言われている。彼らは、外交官や支配体制側とつながっていた人をはじめとした一般の人々、および聖職者らによって助けられた。国際ユダヤ系組織も間接的に支援を申し出た。

フィッシュ家

ユダヤ系商人のゾルタンとイレン・フィッシュはブダペストに住んでいた。彼らの息子のポールとロベルトは、カトリック教徒の乳母、アンナ・タトライに面倒を見てもらっていた。ロベルトは両親とはよくシナゴーグへ、それから乳母とは日曜日に教会へ行っていた。

1944年6月のドイツ占領下のハンガリーで、19歳のロベルトはコマーロムの町で「労働隊」として強制的に徴用された。アンナは彼に食料と衣服を送った。ロベルトが別の収容所へ移されると、彼女は警備員を買収して、何とか彼を訪ねた。彼女は彼に食料と暖かい毛布を渡した。

チューリッヒに住んでいたロベルトの兄、ポールは家族がハンガリーから脱出するためにサルバドール市民権の証明書類を提供したが、書類を使うことができなかった。ゾルタンが労働隊に徴用されており、イレンは彼から離れないと決心したため、アンナが父親の家に彼女を匿った。戦後、フィッシュ家が元の生活に戻れるように、アンナは一家の貴重品を奪われないように埋めたりした。

1945年1月、ロベルトと他の収容者たちはドイツへ強制連行され、マウトハウゼン強制収容所へ、それからグンスキルヒェン収容所まで、食料なしで歩いて行かなければならなかった。ドイツの降伏後に、ロベルトはハンガリーに戻った。

アンナ・タトライは、「諸国民の中の正義の人」の称号を授与された800人を超えるハンガリー人の中に含まれている。

私たちは皆、心の中まで黄色い星を印付けられたと感じています。

ロベルト・O・フィッシュ、ホロコースト生存者

ギゼラ・チェルタン

ギゼラ・チェルタンという若い女の子は、ブダペストでユダヤ系の家族がオーナーの店で働いていた。1944年にドイツのハンガリー占領が始まると、ユダヤ人がキリスト教徒を雇うことは許されなかったため、家族はギゼラを解雇した。そのため、ギゼラは故郷の村、セントペテルルールに戻った。

助けを必要としている人と、それに力を貸す人の運命はつながっているのです。

ギゼラ・チェルタン、諸国民の中の正義の人

まもなく、ハンガリー出身のユダヤ人に対するゲッソーや収容所への強制連行が始まった。ユダヤ人の知人たちの状況の深刻さを理解したギゼラは、妹の雇い主で、ブダペストで仲良くしていたフォルバート家に支援を申し出た。

ギゼラの仲間のマグドルナ・フォルバートは、赤ちゃんのアンナや母親、姉と一緒にセントペテルルールへやって来た。「嘆いたり、不満を言わず、彼女たちは目で私たちに語りかけていた」とギゼラは回想する。

ギゼラには3人の女性と1人の赤ちゃんを匿う余裕がなかったため、隣人のシャラモン・ラヨシュのところを避難場所とした。ギゼラは頻繁に訪れ、日常生活を助けた。セントペテルルール住民の中には、彼女たちの出自に気づく者がいて危ない時もあったが、裏切る者はいなかった。

数か月後、ユダヤ人の女性たちはブダペストに戻ることにした。ナチスの支配下で安全を確保するために、ギゼラは出発前に自分たち一家の洗礼証明書を彼女たちに提供した。まもなくユダヤ人女性たちは「労働隊」から脱出したマグドルナの夫、ロベルトと再会したが、彼らの生活環境は劣悪であった。ロベルトは偽の身分証明書を持っていなかったため、地下室に隠れなければならなかった。

戦争が終わると、ユダヤ人の家族は再びセントペテルルールの社会に温かく迎えられ、健康状態を回復させた。マグドルナとギゼラは親友であり続けた。

ギゼラ・チェルタンは「諸国民の中の正義の人」の称号を授与された850人余りいるハンガリー人の一人である。

ベニート・ムッソリーニ率いる国家ファシスト党は1922年に権力を握った。10月に首相になると、すぐに独裁者になった。反ユダヤ主義はファシストの政治的協議事項としてハイレベルなものではなかったが、ムッソリーニは匿名で反ユダヤ主義の記事を新聞「Il Popolo d'Italia」に発表した。その数年後、イタリアはドイツに近づいたことで、ユダヤ人に対する政策は徐々に変わっていった。ベルリン・ローマ枢軸関係の樹立と反ユダヤ主義のイデオロギーの拡大は、この動きを強化した。1938年にファシスト政権はイタリアのユダヤ人に対して一連の法律を制定した。彼らは基本的な権利を剥奪されて、学校、軍隊および公共サービスからの除外、経営や不動産の所有は禁止、「アーリア人」との結婚は阻止された。また、外国籍のユダヤ人は国を去るように命じられた。

イタリアがドイツの同盟国として1940年6月に戦争に参戦した時、ユダヤ人の人口は46,000人を超えていた。これらは主に国の中央部と北部で同化したユダヤ人であった。さらに、約9,000人の外国籍のユダヤ人がイタリアとイタリア占領下の地域に住んでいた。

1940年、内務省は外国籍のユダヤ人の逮捕と抑留を命じた。しかし、ファシスト政権は同時にイタリアが支配するフランス、ギリシャ、クロアチアの一部に居住する人々を追放することを拒否した。

1943年6月、同盟国がシチリアに上陸したことでイタリアに政治的危機が起こり、ムッソリーニの統治は終わった。イタリア国王のヴィットリオ・エマヌエーレ3世は、ムッソリーニをその地位から追放して抑留するよう命じた。

1943年9月8日、イタリア王国は同盟国との停戦に署名した。イタリア国王は解放に向かっていた国の南部へ逃れた。イタリア社会主義共和国と呼ばれる新しいファシスト政権の党首としてムッソリーニを再任した北部および中部地域は、ドイツの支配下にあった。

ファシスト政権のもと、ユダヤ人に対するより厳しい対策がとられた。ファシスト民兵とドイツ軍はユダヤ人を逮捕し、東ヨーロッパのドイツの強制収容所や絶滅収容所へ強制連行した。1943年10月16日に、ローマで最大のユダヤ人狩りが行われた。まもなくして、イタリア内務省はユダヤ人の逮捕と財産の没収を命じた。1945年3月までに、8,000人以上のイタリア系ユダヤ人と外国籍のユダヤ人が強制連行された。

多くのユダヤ系イタリア人および外国籍のユダヤ人が、地域住民とともに避難場所を確保することができた。ユダヤ人救済組織（DELASEM）、反ファシストのネットワークおよび聖職者のメンバーによって支援された人々もいた。他にも、さまざまな人々のおかげで救出されたケースもあった。それとは反対に、悲劇的な事例もまた多く起きていた。

ホロコーストで、推定7,172人のユダヤ系イタリア人が犠牲になった。

カンディーニ家

ピオとジーナ・カンディーニは、ボローニャからさほど遠くない村、サン・ジョルジョ・ディ・ピアーノのチンクアンタで農場を経営してい

た。彼らにはロマーノとイルマという2人の子どもがいた。誠実で良心的な人々で、どの支援ネットワークにも属さず、ドイツの占領者によって手配中の脱出者を快く受け入れていた。

支援された人々のなかにクオーモ家がいた。ドイツ占領当初、イタリア軍将校のヴィットリオ・クオーモはファシストのイタリア社会主義共和国に忠誠を誓うことを拒否し、逮捕の危険を冒して脱走兵になった。彼の妻のユダヤ系ラトビア人、ルイザ・レベドキンと3歳の息子のエウゲニオは逮捕され、フォッソリ強制収容所へ、後にアウシュビッツ強制収容所へと移送された。危険を察知すると、彼らは村から村へと移動して、チンクアンタのカンディーニ家の農場に行き着いた。

ヴィットリオはピオの助けを借りて、ストーブがある温かい木造の小屋を庭に建てた。寒くなると、その他の親戚や3人の反ファシズムの難民と一緒に小屋で過ごした。ピオとジーナは主にトウモロコシのお粥、パン、ハムなど、わずかな食べ物を分け合った。小さな男の子のエウゲニオとロマーノは遊び仲間であった。

クオーモ家は1945年まで約一年の間、その小屋に住んだ。ドイツ軍大隊が近くで野営した終戦までの数日間、彼らはますます危険にさらされていると感じてボローニャへ移動した。そして、1960年代にイスラエルに移住した。

クオーモ家はカンディーニ家を決して忘れることはなかったが、連絡は取らなかった。両親の死後、エウゲニオは救済者の行方について調べるために、イタリアへ戻った。彼らは1998年に再会すると、エウゲニオ・クオーモはピオとジーナ・カンディーニに「諸国民の中の正義の人」の称号を付与するための手続きを始めた。彼らは700人以上の他のイタリア人とともにその称号を授与されている。

飢えている人がいたら、食べ物を差し出します。

ピオ・カンディーニ、諸国民の中の正義の人

ヴィラ エンマ

1942年の夏、ノナントラ村の邸宅であったヴィラ エンマが、73人の若いユダヤ人難民の避難場所になった。1942年7月と1943年4月にザグレブとスプリットのそれぞれのシオニスト指導者によって、子どもと青年による2つのグループが避難場所へ連れて来られた。難民たちはドイツやオーストリア、旧ユーゴスラビアの出身であった。この家はイタリアのユダヤ人救済組織 (DELA SEM) のによって貸し出されていた。

その当時、かつて豪華な私邸であったヴィラ エンマには、家具や水道、電気さえなかったが、すぐに組織が手配した。ユダヤ人救済組織 (DELA SEM) とヨセフ・インディグ (ヨシュコ) のような指導者のおかげで、生活必需品は確保されていた。シオニスト教育の一環で、ワークショップや実践的な活動ができる学校も設立された。言語と文化の違いがあるにもかかわらず、新来者の誰もがノナントラコミュニティに温かく迎えられた。

1943年9月8日に状況がひどく変わった。ドイツのイタリア占領とともに、グループは重大な危険にさらされた。逮捕や強制連行を恐れて、ヨセフ・インディグは友人の地元の医師、ジュゼッペ・モレアリに助けを求めた。モレアリは、友人のアッリゴ・ベッカリ神父に、神学校でグループを匿うように頼んだ。民家に匿われた子どもたちもいた。その日のうちに、ヴィラ エンマは空き家になった。

10月に、3つのグループに分けられた難民全員がスイスへと旅立った。旅の道中では、少女たちは同仕様のコートを着て、あたかもカトリックの寄宿学校の生徒であるかのように見せた。コミュニティの連帯の取り組みで、少女たちのコートが調達された。ベッカリ神父は生地をはじめ、地元の商店のボタンや裏地を提供し、地域の若い裁縫師たちは朝から晩まで働き、40枚のコートを仕立て上げた。

スイスで一年あまり過ごし、その後1945年に生存者はパレスチナに移住した。アッリゴ・ベッカリ神父とジュゼッペ・モレアリ博士は「諸国民の中の正義の人」として表彰された。

私たちは突然起こされて、ドイツ部隊がノナントラに到着したと聞きました。何も持たず着の身着のまま、すぐにヴィラエンマをあとにしなければなりませんでした。

ゲルダ・テウフナー、ホロコースト生存者

外

第二次世界大戦中、ドイツ占領地のユダヤ人やユダヤ難民の一部は、他の国々に駐在する外国高官や国際機関に命を預けていた。彼らはポルトガルやスペイン、トルコ、スウェーデン、スイスなどの中立国だけでなく、ドイツ国内や枢軸国になったその他の国々、例えばハンガリーやイタリア、ルーマニア、日本でも任務に就いていた。イギリス、アメリカが主導し、後にソ連が加わった反ナチス連合国の外交使節団で働いた人もいた。

外交官がとった対策は大掛かりには実行されなかった。彼らは主に、各国のパスポートやビザの発行にかかわった。そのおかげで、絶滅の危機に瀕していたユダヤ人がパレスチナ、極東、ラテンアメリカ諸国に移住することができた。迫害されていたユダヤ人に、外交特権が及ぶ避難場所を提供した外交官もいた。

これまで外交官たちは、自国の政府の指示に従って財政的支援を得ながら組織的に行動することはあったが、ユダヤ人に対する救援活動については、多くの外交官たちが自国の政策に反して行った。

活動の成功は、ユダヤ人を支援した外交官やその他の人々の創意工夫と勇気にかかっていた。外交官の支援で生き延びたユダヤ人の数を表することはできないが、およそ10万人だと推定されている。

この展示会で名前を挙げている世界の30名を超える外交官たちには、「諸国民の中の正義の人」の称号が授与されている。

交

アレキサンデル・ワドシュとベルン班

1941年にベルンを拠点とするポーランドの外交官たちが、スイスのユダヤ人組織の代表と非公式な協力活動を始めた。他の都市に住む人も含め、この活動はベルン班として知られるようになった。今日では、ベルンの戦時中のポーランド公使館員はワドシュ班で知られている。この公使館員たちの目的は、ドイツ占領下のヨーロッパの国々で第三国の市民、主にユダヤ系のポーランド人やオランダ人、ドイツ人を支援することであった。

その組織網には、計画を容認していた在スイス・ポーランド公使のアレキサンデル・ワドシュや彼の代理、ステファン・リニエビッチ、ベルンのポーランド副領事、コンスタンティ・ロキーツキ、ユリウツシュ・キュール、ベルンのポーランド領事館の若いユダヤ系ポーランド人スタッフ、そしてユダヤ系組織の代表、ジュネーブのユダヤ人虐待救済委員会のアブラハム・シルバーシャイン、およびチューリッヒのアグダット・イスラエル党のハイム・アイスらがいた。ステルンブッフ夫妻も主にオランダのユダヤ人との橋渡し役として、彼らと一心に取り組んだ。

ポーランドの外交官たちは、書き込みのないラテンアメリカ諸国のパスポートを入手し、そこに必要事項を記入してユダヤ系組織に手渡した。身分証明書（パスポートと市民権確認書）は、パラグアイやホンジュラス、ハイチ、ペルーの外交官との協力で、通常は有償で調達されていた。

官

1943年にスイス当局は、この件に関して調査を開始した。1944年、ドイツはラテンアメリカ諸国に対して、パスポート所持者の身元を明確にするよう求めた。多くの難民がパスポートを入手できなくなると、最後は非業の死を遂げた。

ベルンの組織網の活動に関する研究が、近年、歴史家によって進められている。最新の調査結果によると、絶滅収容所への強制連行から人々を保護するために、8,000枚から10,000枚の身分証明書が作成された。これまでのところ、その所持者のうち約800人が救出されたと確認されているが、生き延びた人の正確な数はいまだ不明で、もっと多かったと言われている。

組織網は、スイス在住で勾留されたユダヤ人に物質的な支援も行い、上海のユダヤ系難民やフランスに残留するポーランド系ユダヤ人も助けた。最後に、1941年から1945年にかけて、ドイツ占領下のポーランドのユダヤ人の状況に関する報告を地下のラジオ局を通して内密にロンドンのポーランド亡命政府に伝えた。そして、その情報は連合国当局とユダヤ系組織に伝えられた。

私たちの活動に賛同してくれる好意的な領事から、南米のパスポートを取得することが重要な点です。…それにより人々の運命が変わるのです。

アドルフ・シルバーシャイン、ポーランド外務省
および世界ユダヤ人会議での発言

両親の勇気ある判断で、隠れ家から脱出しました。私は両親に深く感謝しています。そして私たちを助けてくれた杉原氏に会いました。本当に幸運でした。

ニーナ・アドモニ・ヴェルタンス（旧姓）、
ホロコースト生存者

ヴェルタンス家

7歳の少女であったニーナ・アドモニ・ヴェルタンスがワルシャワで学校に通い始めようとしていた時、戦争が勃発した。彼女はワルシャワとヴィリニウスの伝統を継承する裕福なユダヤ人家庭に生まれた。

1939年9月にニーナの両親のジュディスとジャクブは、ワルシャワを離れてヴィリニウスの親戚のもとへ行くことになった。ヴェルタンス家やその親戚、その他の知り合い11人が一台の自動車にぎゅうぎゅう詰めになって、爆撃された街を離れた。

1940年半ば以降、ヴィリニウスはソ連部隊によって占領された。「兵士たちが私たちのアパートに資本家がいると目を付け、真夜中に搜索を始めました。常に私たちはその監視下にいました」とニーナは回想した。家族の何人かが逮捕されてシベリアに強制連行された。ヴィリニウスを脱出することを模索していたジュディスは、ユダヤ人難民にビザを発行していたカウナスの日本人領事、杉原千畝について知った。

杉原は、日本の国家政策に反して、何千人ものユダヤ人に日本への通過ビザを発行した。証明書は、彼らに入国だけでなく短期滞在も認めていた。それでもまだ、日本が最終目的地ではないという証明を必要としていた。オランダ人外交官のヤン・ズヴァルテンディクはヴェルタンス家に、キュラソーへの正式な渡航許可書を与えた。

ヴェルタンス家は、モスクワとウラジオストクを経由して日本へ向かった。航海は楽ではなかったが、ニーナにとってそれは刺激的な冒険であった。家族は、神戸に落ち着くとユダヤ人コミュニティの支援を受けた。ニーナは、日本の文化や自然に親しみ、学校に通い友人もつくった。

数か月後に、一家はビザが不要な上海へ向けて出発した。彼らは無国籍の難民として上海に住んだ後、1947年にアメリカへ渡り、ニューヨークに定住した。

杉原千畝とヤン・ズヴァルテンディクは、「諸国民の中の正義の人」として認められた。

生と死の間で

ホロコーストは、およそ600万人のヨーロッパのユダヤ人の命を奪った。生存者の何人かは、救いの手を差し伸べてくれる人々と出会った。支援の手を差し伸べた人と、生き延びることを求めた人。両者の行動は、誰かの命を代償にするほど危険なものであった。ヨーロッパ地域の戦況やユダヤ人の悲劇的な運命に対する意識、その他の個別的な要因から、さまざまな方法で支援活動が行われた。

これらの救済の物語は、残念ながら、ホロコーストの歴史のほんの一部にすぎないが、重要な出来事である。今日知られている物語は、生存者と救済者の両者の関係があったからこそ成り立った例外的なものであり、どちらの側にいたとしても、秘密裏に行動しなければ、最後に幸運をもたらす保証などどこにもなかったからである。隠れることや身分を偽ることへの忍耐とともに、ユダヤ人の外見を隠して周りに溶け込むこと、そして裕福であることが助かるためには重要であった。運命に委ねたところもかなりあったが、多くの場合、一人の人を救出するために多数の救済者がかかわらなければならなかった。一方で、誰かの誤った振る舞いが悲劇的な結果へと導き、救出が失敗することもありえた。

支援した側とされた側、両者ともに極限状態にあったという証言もある。懲罰や身近な人々に裏切られるかもしれないという恐怖、しばしば迫ってくる貧困と飢餓という状況下における人間関係は、私たちに多くのことを教えてくれる。

それゆえに、これらの物語は簡単に説明できるものではない。そこには、ユダヤ人の悲劇的な状況や隣人の密告者の存在だけではなく、長年の友情とさらに深い関係から生まれた、限りない献身と思いやりの物語があった。それにもかかわらず、戦後、多くの救済者と生存者の歩む道は分かれてしまった。しかし、自分たちの救済者に「諸国民の中の正義の人」の称号を与えられるように、生存者たちが再び、彼らに連絡を取ることも多々あった。

ホロコーストの時代に、ユダヤ人へ差し伸べられた救済の物語は、世界中の多くの人々や機関の努力のおかげで現在も記録され続けている。これらの物語は前例のない歴史上の出来事に関することだが、今日の私たちにとっても共感できるような普遍的な意味を有している。差別に反対する力や人間が生きようとする力、そして、悲劇に直面した時の人間の振る舞いや行動のメカニズムについて、私たちがより多く学ぶことができる遺産なのである。

ホロコーストという生と死の間に立ちすくんでいた人々に与えられた救済の物語を記録しておくことは、今日の私たちに課せられた義務である。それは、当時の勇敢な人々について伝えるだけではなく、彼らが持っていたような人間らしさや誠実さがこの先の未来を光導くことになるからである。

諸国民の中の正義の人の称号を授与された人々が、この展覧会に登場しない人々を含め、たくさんの国々で活躍しています。ヤド・ヴァシェムから入手した正義の人のもっとも新しい名簿を公開して、彼ら全員を心に刻んでおきたいのです。

アルバニア	75
アルメニア	24
オーストリア	109
ベラルーシ	641
ベルギー	1,731
ボスニア	43
ブラジル	1
ブルガリア	20
チリ	2
中国	2
クロアチア	115
キューバ	2
チェコ	116
デンマーク	22
エクアドル	1
エジプト	1
エルサルバドル	1
エストニア	3
フランス	3,995
ジョージア	1
ドイツ	601
ギリシャ	335
ハンガリー	844

インドネシア	2
アイルランド	1
イタリア	682
日本	1
ラトビア	136
リトアニア	891
ルクセンブルク	1
マケドニア	10
モルドバ	79
モンテネグロ	1
オランダ	5,595
ノルウェー	67
ペルー	2
ポーランド	6,706
ポルトガル	3
ルーマニア	60
ロシア	204
セルビア	135
スロバキア	572
スロベニア	10
スペイン	9
スウェーデン	10
スイス	49
トルコ	1
ウクライナ	2,573
イギリス	22
アメリカ合衆国	5
ベトナム	1

諸国民の中の正義の人の氏名と人数一国および民族別、2017年1月1日現在